

新しい年を迎えました。この年も、み言葉に聞いて、神を礼拝してまいりたいと思います。今日からまた、サムエル記に戻り、ダビデ王物語に聞き続けていきたいと思います。

ダビデはすぐれた王さまでありましたが、ある時深刻な罪を犯しました。それは部下の妻をそれと承知で寝とり、その部下を戦争の最前線に送り戦死させ、さらにその部下の妻を自分の妻とした、というものでした。

当時の王のやったことなので、おそらく誰もダビデにその罪を指摘することはできないし、そもそも部下を戦死させた、などということはある意味合法的に行われているので、闇から闇に葬られたことでもありました。

ところが王宮にあって神の言葉を取り次ぐ、預言者ナタンという人物がいて、巧みなたとえ話をして、ダビデに自分の罪を気づかせ、そのダビデに対して、神の言葉を取り次ぐのです。それは神の激烈とっていい言葉でした。

ダビデはその神の言葉を聞き、わたしは主に罪を犯した、と告白するのです。

神はそこで、ダビデに対して、あなたの罪を取り除く、あなたは死なない。だが、主を甚だしく軽んじたので、バト・シェバとの間に生まれてくる子は必ず死ぬ、と語るのです。

人は誰でも、自分の罪を認めることは難しいのです。ダビデのように歴然とした罪を犯した人でも、自分から罪を認めようとはしない。自分の中の理屈や、言い逃れ、誰にも知られてなければいいではないか、という思いがあったのです。しかしダビデに限らない、誰でも自分の罪を認めようとはしない。例えば、自分の隣人を心から愛し、受け入れていない、ということは神の前での罪です。しかし、それを神の前での罪とちゃんと自覚し、認めているか。善くないな、程度に受けとめることはあっても、そんなこと罪として認めようとはしない。ダビデは、たとえナタンからの言葉によってでもあっても、人に対する罪、そしてそれが神の前での罪であることを認めたのです。そして神はダビデの告白を良しとされたのです。

だが生まれてくる子供は必ず死ぬ、というのです。それは、ダビデの犯した罪に対する罰、と捉えざるを得ない。人は自分の犯した罪がさまざまな現実になって帰ってくる時に、自分の犯した罪の大きさを知る、という面がありま

す。例えば相手の人を傷つけ、その人が自分に対して心を閉ざしてしまった、という現実に向き合ったときのようにです。自分の犯した罪の代償を自分が負う、ということでも、人はできたら逃げ出したい。しかし自分の犯した罪で子どもが死ぬ、という神の言葉に向き合えば、ダビデは驚き恐れ、畏怖したでしょう。なぜダビデの犯した罪によって子供が罰せられるのか、という問題がここにはあります。ありますが、この問題は大きすぎて今ここでは扱いきれません。旧約聖書には親の罪が子に問われるという考え方がありますが、またそうではない場合も多い。広く言えば、日本でも、かつての日本人が引き起こした戦争の責任を戦争を知らない今の世代が負う、というように世代を超えた罪の責任の問題があります。今ここでは、事実としてダビデの罪が子どもの死という形で裁きを受けているという事実をそのままに受けおきましょう。

ダビデは、衰弱していく子どものために、神に願い、求め、断食しました。彼は引きこもり、地面に横たわって夜を過ごした。それを見守っていた王宮の者たちは、たいそう心配し、王に食事をとらせようとしたが、ダビデは地面から起き上がろうともしなかった。

七日目に子どもが死んだとき、家臣たちはそのことを王に知らせることを恐れた。お子さんが生きてるとき、あれほどもだえ苦しみ、祈り引きこもっていたのだから、子どもの死の知らせを聞けば、王はどうにかなってしまわれなにか、と案じたのです。だがダビデの反応は家臣たちからすれば以外という他ないものでした。

ダビデはわが子が死んだ、という知らせを受けると、地面から起き上がり、身を洗って香油を塗り、衣を着替え、主の家に行って礼拝し、王宮に戻ると、食事をした、というのです。そのあまりの変わりように、家臣たちが訝しがり尋ねるのです。するとダビデは応えます。「子がまだ生きている間は、主がわたしを憐れみ、子を生かしてくださいかもしれないと思ったからこそ、断食して泣いたのだ。だが死んでしまった。断食したところで何になろう。あの子を呼び戻せようか。わたしはいずれあの子のところへ行く。しかしあの子がわたしのもとに帰ってくることはない」。ダビデは、子どもが生きている間、何を思い、何を祈り、涙したのでしょいか。自分の子どもの衰弱が自分の冒した罪と深く関係するとすれば、どうしてもその罪のことは考えざるを得なかったでしょう。悔やみもしたでしょう。情けない思いもしたでしょう。だがその罪は取り除かれた、許された、と言われたのでした。しかし生まれてきた子は必ず死ぬ、とも言われた。なぜ罪が取り除かれるのに、我が子が死なねばならぬのか、わたしの罪の償いはわたしの死ではなく、子どもの死でなければならぬのか。ダ

ビデの思いは堂々巡りのようにぐるぐると回ったでしょう。

ダビデは子どもの衰弱の中で何を祈ったのでしょうか。

ダビデは詩編の中で、こう祈っています。

「一つのことを主に願い、それだけを求めよう。いのちのある限り、主の家に宿り、主を仰ぎ望んで喜びを得、その宮で朝を迎えることを。」

「心よ、主はお前に言われる。わたしの顔を尋ね求めよ。」

ダビデは、子どもの病気が癒されること、そのいのちが守られること、それは当然祈ったでしょう。しかしそれだけではなかったはずです。なぜなら祈るということは、神を求めることだからです。主の家の受忍であること、神の御顔を尋ね求めること、神のみ心に聞き、その神のみ心の中で生きる者とさせてください、とダビデは祈り続けてきたのです。もし、祈りの中心が、自分の願い、祈願であるなら、その祈りが聞かれなかった時、祈りは空しい、ということになってしまいます。そもそもそれは自分の願望を神に押し付けるだけのことになり、神のみ心ではなく、自分の思いのままにしてください、ということになってしまいます。ダビデは、子どものことを必死に祈りつつ、さらにそれ以上に神を求めた。神のみ心の中で生かされていきますように、と祈った。

それはまた別の言葉で言えば、神を信じる者とさせてください、神に信頼する者とさせてください、ということです。

子どもが癒されれば、神に感謝する、しかしそうでなければ、神を恨む、自分の願いが聞かれれば、神に感謝し、聞かれなければ、神など信じない。そういう自分本位な、自分の頭で造ったような信仰もどきではなく、どういう中にもあってもあなたに信頼し、あなたのまことを信じる者とさせてください、そう祈ったことは、ダビデの詩篇から滲み出てきます。

なぜ自分の罪ゆえに子供が死ぬのか、つきつめて言えば、ダビデには何もわからなかったでしょう。さらに言えば、なぜ自分の罪は取り除かれたのか、なぜ自分は罪のゆえに死ぬことはなかったのか、ダビデはわからなかった。しかしそのわからないことだらけの中で、預言者ナタンによって、ダビデは神の言葉を聞いてきたのです。そしてダビデは、わからないことの中で、自分なりの理解や納得よりも、神を求め、神に信頼させていただくこと、神を信じていくことを最優先のこととしたのです。というか、それこそが大事だと、彼は受けとめていたのです。

子どもが衰弱していったときは、食事もとらず引きこもり涙したダビデが、死んだら、立ち上がり、身を清め、香油を塗り、主の家で礼拝し、普段通りの食事をした。そんな身の変わりようがあるか、という人も少なくないでしょう。

しかしここにはダビデという人の旧約聖書屈指の信仰によって生きる生々しい姿があるのではないか。子が生きるか死ぬか、そこで人間が治療に関わる部分があるにせよ、最終的には神のなさる業です。もしそのことを信じているのなら、生きていた間は、ひたすら神のそのお働きにおすがり、死んだときには、この地上での生は終わったと受け取り、神に委ねた。自分はまた、神を信じて、もとの生活に戻ればいい。それだけだ、と思ったのです。それはダビデという一信仰者の最も深い在り方、神に信頼し、神を信じて生きる、ということ基底です。

もちろんダビデはここで悲しみに捉えられていたでしょう。慟哭もあった。しかし、誤解を恐れずに言えば、後悔はないのです。なぜか。パウロ的に言えば、「わたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」。どうしようもな悪の人であり、どうしようもない罪人であるということをとということを骨の髄が知っている人の発言がここにあり、かつ、その罪人のわたしが神によって赦されていま生かされているのなら、ただ神の恵みにすがって今を精いっぱい生きる以外に、わたしの歩む道はない、ということです。後悔して反省してがんばろうなどというような楽観主義も、自分の力で何とか、というようなものは微塵もないのです。ダビデは言うまでもなく、パウロに通ずる信仰者なのです。

そして最後に、子を失ったダビデの慟哭を思う時に、神の独り子をわたしたちの罪の裁きのために十字架にかけ給う神の慟哭はいかばかりか、と今日の聖書箇所は遙かに指示しているのではないか。